小中連携によるＩＣＴ活用授業実践に係る取組

糠内学園　幕別町立糠内中学校　学級数４　（校長（学園長）　田中　幹也）
幕別町立糠内小学校　学級数５　（校長（副学園長）　笠原　　聡）
幕別町立明倫小学校　学級数３　（校長（副学園長）　河井　義徳）

Ⅰ　取組の概要

本学園は複式学級を有する小規模３校（小２校、中１校）による併設型小中一貫校である。児童生徒への１人１台端末配付を機に、学園組織の一部会である「変える力」部会が企画・立案するなど、中核となり、ＩＣＴ活用授業実践に取り組んでいる。

Ⅱ　実践の概要

１　日常の授業実践

外国語科では、Jamboard で生徒の考えを共有し、互いの考えに対する対話を行うことで、つまずきをその場で修正しながら学びを深めるとともに、Google Forms のアンケート機能を活用した単元テストや小テストにより解答状況を即時に把握して生徒へのフィードバックに生かすなどのＩＣＴ活用に取り組んでいる。また、クラウドに英語の音声データを共有し、夏休みの課題に活用できるようにするほか、数学科では、教室のテレビモニターに生徒の端末画面を表示し、拡大・縮小機能やペン機能を活用して説明や指導に役立てるなど、各教科等における実践に取り組んでいる。

【ICT を活用した授業の様子】

２　Web 会議システムを活用した遠隔授業実践

①　やむを得ず登校することができない児童生徒に対するオンライン授業の実施体制を糠内学園で統一して整備している。

学校と家庭を Web 会議システムでつなぎ、児童生徒は、持ち帰った端末で授業に参加している。通話やチャットの機能を活用し、リアルタイムで学習に取り組むとともに、板書等の授業記録をデータ化し、クラウドに保存することで、家庭でも授業の記録を見ることができるようにしている。

②　各小学校の第４学年の在籍児童数が１名であり、日常の対話的な学習の手立ての充実に課題が見られたことから、昨年度から国語科、算数科、朝学習の時間に、学校間を Web 会議システムでつなぎ、合同による遠隔授業を行っている。児童は、交流学習の際に、相手意識・目的意識をもって考えを伝え合うなど、意欲的に学習していた。また、今年度は、鹿児島県奄美大島の小規模小・中学校とのオンライン交流を夏と冬の２回行い、互いの地域の特色や学校生活の様子を伝え合うことを通して、自分達の地域のよさを再認識した。

【遠隔授業の様子】

３　小中連携した教職員研修

授業参観日と併せて、学園の教職員の授業参観を実施し、各校の取組の周知やＩＣＴの活用実践について研修を深めるとともに、「変える力」部会による、情報交流通信「カエルの力」を年間６回発行し、教職員が実践の中で得たスキルや情報（Tips）を紹介し、学園内での情報共有に努めた。教育実践交流会では、授業公開及び実践発表を通して小中連携の充実を図っている。

Ⅲ　成果（○）と課題（●）

○　「まずやれるところから」を合言葉に全教職員で意識したことにより、児童生徒に資質・能力を身に付けさせるための実践を継続して積み重ねることができた。

○　クラウドを活用したスケジュール管理やデータ共有・共同編集、アンケートの実施・集計等、校務における業務のＩＣＴ化が図られたことにより、教員の端末活用能力の向上が図られるとともに、授業における効果的な活用が推進された。

○　やむを得ず登校することができない児童生徒等に対して、学びを保障するためのオンライン授業を日常的に行う体制が整備されるとともに、地域・保護者への理解を進めることができた。

●　ＩＣＴ活用を学習指導の効率化のみに留めず、義務教育９年間で身に付けさせたい児童・生徒のＩＣＴ活用能力について系統性を意識し、学びの質の向上につなげる必要がある。

地域とともに職員全員で子どもを支える義務教育学校

新得町立富村牛小中学校　学級数５　（校長　石丸　揚一朗）

Ⅰ　はじめに

本校は、平成７年度から山村留学生を受け入れ、令和４年４月現在、全校児童生徒12名のうち、４名が道外からの山村留学生である。これまで本校は、学校・地域と保護者の連携による義務教育９年間の教育活動を支える環境の整備を図り、小・中学校の職員による相互乗り入れ授業の実施や校務分掌の一体化を推進してきた。こうした歴史と実績を踏まえ、令和４年４月より、「確かな学力」、「豊かな人間性と健やかな体」、「地域や自然、人を愛する心」をより一層育むため、義務教育学校として新たにスタートを切った。

Ⅱ　全ての職員で子どもたちの学びを支える教育活動

１　全学年教科担任制による学びを支える学習活動

個別最適な学びの実現に向け、小規模校の強みや、教職員の専門性を生かし、前期課程において教科担任制を導入した。その際、各教職員の１週間あたりの平均授業担当時数が18～20時間となるように時間割を工夫することにより、１日１時間以上、教材研究や分掌業務等を行う時間を確保することができ、業務の効率化が図られるなど、働き方改革の推進につながっている。

２　全教職員で行う生徒指導

小規模校の利点を生かし、全教職員で生徒指導を行う意識をもち、発達の段階に応じた学校生活のルールを作成するとともに、子どもたちの意見を取り入れ改善することにより、自治意識の醸成につながっている。また、少年団活動・部活動についても、全教職員が児童・生徒の内面に寄り添った指導を意識し、日々、子どもたちの心身の成長を支えている。

	よく考え、進んで学ぶ子ども《頭が元気》	なかよく、力を合わせる子ども《心が元気》	健康で、明るい子ども《体が元気》
小学部低学年	・先生や友達の話を静かに終わりまで聞ける。 ・自分の考えや気持ちをのびのびと発表できる。 ・落ち着いて考えることができる。	・返事や挨拶がはっきりできる。 ・てきぱきと行動し、友達と仲良くする。 ・自分の物と他人の物とを区別し、大切にすることができる。	・健康安全に注意し、危険なことをしない。 ・遊具を正しく使い、元気に遊ぶことができる。 ・他人に頼らず、自分のことは自分でできる。
小学部中学年	・他人の話を注意して聞くことができる。 ・わからないことは進んで質問し、自分の考えをはっきりのべることができる。 ・友達の意見に反応し、進んで考えることができる。	・言葉遣いを正しく、気持ちのよい返事や挨拶ができる。 ・公共物を大切にし、他人のためになることに目を向ける。 ・きまりを守り、きびきびと行動できる。	・身の回りをきれいにし、後始末がきちんとできる。 ・健康安全に注意する。 ・進んで丈夫な体をつくるよう体力作りに心がける。
小学部高学年	・自分の考えと比較しながら聞くことができる。 ・簡潔に自分の考えを話すことができる。 ・ねばり強く最後まで考えることができる。	・相手の立場を尊重し、友情を深めることができる。 ・礼儀正しく、時と場にあった挨拶ができる。 ・美しい心をもち、誰にでも親切にする。	・自他の健康安全に注意し、危険防止について考えることができる。 ・自分の目標に向かって、体力作りに励む。
中学部	・他人の意見に耳を傾けることができる。 ・学ぶことの楽しみや喜びを体得できる。 ・自ら課題を見つけ、解決することができる。	・勤労、奉仕の大切さを知り、世のためになる仕事を積極的にする。 ・常に自分の行いを反省し、責任ある行動をとることができる。	・正しいと信じたことは進んで実行し、最後までねばり強くやり抜くことができる。 ・進んで計画を立てて、自発的に体力作りに努める。

【「学年段階目標」の設定】

Ⅲ　地域とともに義務教育９年間の「学び」や「育ち」を支える学校

１　「たくましく実践力あふれる子どもの育成」

９年間を通じて目指す子どもの姿を、「学年段階目標」として示し、保護者・地域と共有している。特に、結成50年の歴史をもつグリーンクラブ（緑の少年団）は、保護者・地域、教職員が指導員を担い、自然に親しみ、自然を理解する活動を通して、環境を守り育てる資質・能力を育てることを目標として、地域総がかりで子どもの育成に寄与してきた。このような地域資源を子どもたちの学びや育ちのために、効果的に取り入れることにより、目指す子ども像の実現に向けて、保護者・地域、学校で成果や課題を共有しながら、取組を推進することができた。

【グリーンクラブの活動の様子】

Ⅳ　成果（○）と課題（●）

○　教科担任制の導入により、教科の専門性を生かした授業改善の取組が推進されるとともに、分掌業務等においても、効率的な業務の推進が促進され、勤務時間の削減等、働き方改革にもつながった。

○　地域の豊かな自然環境を生かした体験を伴った学習や、地域の人々との交流を通じて、子どもたちが自らの学びを支える地域のよさを知り、地域に対する愛情を育むとともに、保護者や地域住民に学校や子どもたちの様子を伝える貴重な活動となっている。

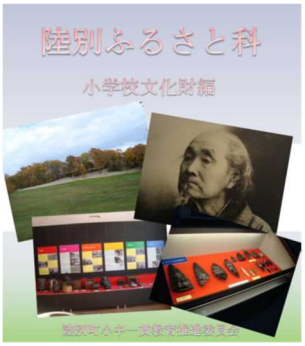
●　地域人材の高齢化等に伴う指導員の確保及び働き方改革との関連に伴う教育活動への教職員の関わり方について検討し、整理をする必要がある。

寒さがつなぐ、地域とのあたたかい絆

陸別町立陸別小学校　学級数６　（校長　阿　部　昌　己）

Ⅰ　はじめに

陸別町では、平成 31 年度（令和元年度）から小中一貫教育を始め、義務教育９年間を見通した特色ある取組を進めている。その中で、陸別町の歴史、環境、産業イベントについての学習を通して、「ふるさとに住んでいる誇りをもち、夢と希望を主張し、きらきらと輝く児童を育成する」ことをねらいとする「陸別ふるさと科」を新たに開設し、低学年の「生活科」、中学年以上の「総合的な学習の時間」に位置付け、町独自に作成したテキスト「りくべつ検定」（小・中学校編）を活用し、ふるさと教育を推進している。



【陸別ふるさと科テキスト】

本校においては、「しばれフェスティバル」などの町内イベントと関連を図るなど「日本一寒い町りくべつ」の観光資源を生かした学習を進めている。

Ⅱ　陸別ふるさと科「しばれフェスティバル」への参画

１　発達の段階に応じた教育課程

陸別ふるさと科では、地域の特性や陸別町の行事の楽しさを伝え、自分達の町のよさを広く情報発信することをねらいとして、発達の段階に応じて学習内容を整理した指導計画を作成し、毎年２月に開催されるしばれフェスティバルに向けた学習などに取り組んでいる。

【昨年度のしばれフラッグ】

しばれフェスティバルに向けた学習では、高学年はフェスティバル会場の入口に飾り、祭りを彩る「しばれフラッグ」を作成したり、町伝統の「木やり太鼓」やダンスを披露したりするなど、小学校段階における学びの姿を地域の人々に公開することを通し、児童の育ちを地域と共有している。

２　「地域と繋がる」「地域を知る」「発信する」学習過程

①　地域と繋がる

フェスティバル実行委員の方を招聘し、しばれを実感するためのバルーンの作成方法を学ぶとともに、フェスティバルに懸ける思いを伺うことにより、主体的に学習に取り組むことができるようにした。

【昨年度のしばれ学習の様子】

②　地域を知る

大学教授を講師に招き、「しばれ学習」の一環として、陸別の気候の特性について学習した上で、しばれフェスティバルと関連付けて理解を深めることができるようにした。

③　発信する

観光資源を生かした陸別町の取組をまとめた「しばれ新聞」を作成し、来場者へ配付したり、横浜市内の小学校とオンラインによる交流授業を行い、地域の特性などについて交流したりしている。

Ⅲ　成果（○）と課題（●）

○　地域の豊かな観光資源について理解し、地域の人々とつながることを通じて学んだことを発信する活動を系統的に行うことにより、発達の段階に応じたふるさとに対する誇りや愛着を育むことができた。

○　探究的な学習過程に体験活動を取り入れることで、児童が主体的にふるさとのよさについて考えることにつながった。

●　教職員の働き方改革の観点から、イベントへの関わり方について検討、整理をする必要がある。